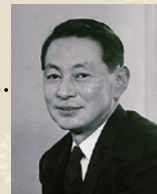


アルバックの恩人たち②

この会社がなかったらアルバックは真空総合メーカーになれなかったかも!?



たなべ ともたろう
東洋精機株式会社 第四代社長 **田邊 友太郎**

株式会社東洋精機 真空研究所 真空総合メーカーへの扉を開いてくれた恩人



現在の東洋精機本社工場（兵庫県尼崎市）



旧東洋精機本社工場
(1956年からアルバック尼崎工場となる)

株式会社アルバックは、真空総合メーカーとして、真空部品から材料、真空ポンプ・計器類などのコンポーネント、真空装置に至るまで幅広い製品を提供している。しかし、その扉を開いてくれたのは、アルバックの自力によるものでなく、1956年に株式会社東洋精機 真空研究所との合併によってもたらされたものである。

● 110年の社歴を誇る東洋精機

東洋精機株式会社（以下、東洋精機）は、1908年（明治41年）に福岡の松本鑓（やすり）製造所を買収して大阪に松本鑓合資会社として創業されたのがはじまりで、1946年（昭和21年）に真空部門を開設した。

太平洋戦争終了後直ちに真空機器製作の必要性を痛感し、当時原子物理学の第一人者だった大阪大学の菊池正士教授を研究室長に迎える。この頃、戦後の混乱期にも関わらず、

他にも東京真空、神港精機、共和真空など、真空機器メーカーが相次いで創業している。東洋精機は産学共同で油回転真空ポンプや真空乾燥機、真空蒸留装置を製造し、「真空のパイオニア」としてペニシリンや血清の製造、鯨の肝油からビタミンAを精製するなど、製薬や製油、化学をはじめとする産業界に貢献していた。

そして1953年に真空部門を分離し、株式会社東洋精機 真空研究所が設立された。

東洋精機は現在、超高圧空気系バルブ、非鉄金属精密型打鍛造に高い技術と長い歴史をもつ110年企業である。東洋精機の80年史にも、「(アルバックは)名実共に真空専門の国内トップメーカーであり、また世界屈指の専門メーカーとして発展し、全世界にその名をとどろかせている。まさに昭和21年当時、密田良太郎博士と田邊友太郎社長が社運をかけて種をまき、育成した希望の木は素晴らしい花を咲かせ、今や立派な果実を結んでいる。」とアルバックとの合併の歴史が紹介されている。

ちなみに、アルバックの出資者の一人である松下幸之助氏の自宅兼工場が東洋精機の大阪工場（当時本社工場）がある大阪市福島区大開にあり、松下幸之助氏が当時（1918年頃～）よく工具や治具類を借りにこられたり、プレス機械の技術的な相談をしていたそうである。

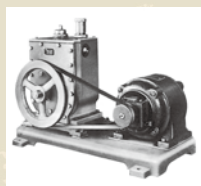
アルバックの1957年頃の営業内容

株式会社東洋精機 真空研究所との合併により、アルバックの取扱商品は下記の通り幅広いラインアップで構成されるようになった。

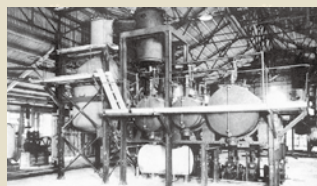
- ・真空化学装置（各種真空蒸留装置）
- ・真空冶金装置
 - 真空溶解炉
 - 真空焼結炉
 - 真空焼鈍炉
 - 真空脱ガス鑄造装置
- ・真空含浸装置
- ・各種排気装置
- ・ブラウン管連続排気装置
- ・電気冷蔵庫連続排気乾燥装置
- ・魔法瓶自動排気台
- ・超高真空排気装置
- ・真空蒸着装置
- ・真空成型機
- ・真空ポンプ、バルブ
- ・真空計
- ・各種真空用材料

【輸入】

- ・米国：NRC社製品
- ・ドイツ：ライポルト社製品



東洋精機製
回転型真空ポンプ「R-1型」
(1948年頃)



東洋精機製
可塑剤用高真空蒸留装置
(1949年頃)



東洋精機製
分子蒸留装置
(1948年頃)



1,600トン鍛造プレス



1,600トンプレスの大型鍛造品



高圧バルブ
(圧力計用止弁、油圧用止弁、油圧用電磁弁)

●田邊東洋精機社長の英断で 実現した アルバックとの合併劇

2002年アルバック発行50年史『真空に生きるⅢ』より抜粋し、東洋精機との歴史を振り返ってみる。

1956年(昭和31年)11月、アルバックは兵庫県尼崎市の株式会社東洋精機 真空研究所(資本金500万円)と合併した。この合併は、歩きはじめてばかりの当社(=アルバック)および日本の真空業界にあって、その後の発展に大きな意義のあるものとなった。

当社にとって、真空技術は将来有望な事業であり、ますます高度化する産業界に、必要不可欠な先端技術として受け入れられるものと確信していた。しかし、現実のごく限られた小さな市場のなかで、価格競争を繰り返している状況であった。つまり、お互いの技術を競い合うのではなく、お互いの企業体力をただ疲弊するだけのまったく不毛の競争であった。「将来有望とはいえ、これでは真空業界の発展は望めない。いつまでたっても日本の産業に貢献できない……」という危惧を当社の経営陣は抱いていた。

関西で株式会社東洋精機 真空研究所を経営していた田邊友太郎東洋精機株式会社(1908年創業)社長もそのような考えをもっていた一人であった。株式会社東洋精機 真空研究

所は、1946年(昭和21年)に東洋精機が開設した真空部門をさらに発展させ、1953年(昭和28年)に同社から分離し設立されたもの。東洋精機との産学協同で、真空業界の発展に力を注いでいた大阪大学の菊池正士教授もまた、同様の考えをもっていた。

菊池教授は、当社の技術顧問の嵯峨根遼吉と熊谷寛夫と、東京帝国大学で同じ学問を志す同門の間柄にあった。当社と株式会社東洋精機 真空研究所の合併は、このようなことを背景にして1956年(昭和31年)4月に合併交渉がまとまり、同年11月に正式にスタートした。

当社が後発の企業にもかかわらず、社名は日本真空技術株式会社(アルバック設立時の社名)となり、資本金は両社の資本金を合わせた2,300万円、従業員についても東洋精機 真空研究所の46人全員が当社に移籍した。したがって、従業員数は56人から102人という大世帯となった。

尼崎の本社工場は、当社の尼崎工場(工場長:小林省己)となり、業務についても、同社が開発してきた凍結真空乾燥装置、真空化学装置、真空用バルブ、真空ポンプなどの製造をそのまま引き継いだ。田邊友太郎社長は、当社の取締役として参加し、菊池正士教授は、西堀栄三郎、嵯峨根遼吉、熊谷寛夫とともに、当社の技術顧問として引き続き指導をすることになった。

1956年度(昭和31年度)の決算では1億6,500万円の売上を計上し

た。この合併によって当社は、ただ単に企業規模が拡大しただけではない。自社製品、つまり国産化率が93パーセントを占めるようになった。当社は、両社の技術を結集させたことにより生まれる、新たなパワーを後ろ盾にして、“産業への貢献”という大きな使命に立ち向かう体制を整えたのである。

●合併後もアルバックにとって 大切な企業文化を受け継ぐ

1963年に当時米軍により一部接収されていたアルバックの横浜(井土ヶ谷)本社工場が全面接収解除となり、尼崎工場は横浜本社工場に集結された。

その後、1988年には鹿児島工業団地に九州真空技術が設立され、尼崎工場で培われたポンプ製造を同社に移管し、現在のアルバック九州に受け継がれている。尼崎工場の下請け会社だった工場は現在のアルバックテクノの大阪CSセンターとなっており、現在も東洋精機のすぐ近くにある。

このように東洋精機とアルバックは違う道を進んできたが、両社は現在も技術に自信をもち創業時の信念を貫いている。100年企業を目指すアルバックにとって、これからもこのDNAを大切に持ち続けていくことであろう。